

沖繩闘争勝利にむけて一

4.28沖繩人民と連帯する映画・講演集会報告集

— 目 次 —

I. 講演

「軍靴の高まりの中で
一核・沖繩・天皇を考える一」

金城 実氏

II. アピール・発言

(桑原重夫氏 他)

III. 基調報告・資料

4.28集会実行委員会

はじめに

四月二日、我々は「沖繩人民と連帯する映画・講演集」を金城実氏を講師に招いて圧倒的な結果をもって勝ち取った。このパンフレットはその時の講演も収録したものである。

昨午二・五名古屋パネル粉砕をもつて決戦のどぶたを切つておとした刑法改訂「正」一保任近行との闘いにおいて、この攻撃が、刑法・天皇・自衛隊の三位一体としてあり、このかんの軍事予算の大支出や天皇一改憲攻撃を見た時、天皇との闘いも刑法改訂と一体のものとして向われていることな鮮明になり、また、軍事予算大支出に見られる自衛隊の強化が、沖繩への核配備・米軍基地の強化として身肉的に進行しており、「沖繩返還」の闘いも「天皇をたもつ」を出して扱つておいている日米の闘いもこの部分に鋭く要求を出していることな確認された。かかる視点の下、刑法改訂を闘い抜いておいた我々は、刑法改訂で固く結合させて核自衛隊一沖繩一天皇と対決す

る闘いを創出すべく集会を準備した。その間二回の学習会(①沖繩の歴史と現実、②天皇と沖繩)を積み重ねた。さらに集会における金城氏の講演、映画、基調、スピーチ等そのことなより一層鮮明となった。

我々は、七〇・七二の沖繩闘争の敗北を痛みに総括し、もつて八〇年代の沖繩闘争の創出にむけて、集会を圧倒的な結果、就中注「本土」沖繩人民の結果を勝ち取り、この成功を引上げて、五・一四一五核自衛隊一日「闘」一沖繩・天皇一改憲闘争に全力で共起した。そして、機動隊の弾圧をはねかえし、最後まで闘い抜いた。我々はわがなではあるが着実に新たな沖繩闘争のオーパスを切り拓いた。

このパンフレットが、沖繩闘争を目指す多くの友達に何かを提示出来れば幸いである。

最後に御多忙の中を講演をお受け下さり、里には一丁も起ここの原稿に先を入れて頂いた金城実氏に深く感謝するものである。

四・二八実行者を代表して、大阪・深山・花塚芝園

中絶の入り口から戦時の中絶を禁止しよう。止む可
 くの可断を禁止するは中絶の入り口を閉鎖するに
 似て、これを禁止するは戦時中絶の入り口を閉鎖す
 るに似て、戦時中絶の入り口を閉鎖するは戦時中
 絶の入り口を閉鎖するに似て、戦時中絶の入り口
 を閉鎖するは戦時中絶の入り口を閉鎖するに似
 て、戦時中絶の入り口を閉鎖するは戦時中絶の
 入り口を閉鎖するに似て、戦時中絶の入り口を
 閉鎖するは戦時中絶の入り口を閉鎖するに似て、

中の入り口から戦時の中絶を禁止しよう。止む可
 くの可断を禁止するは中絶の入り口を閉鎖するに
 似て、これを禁止するは戦時中絶の入り口を閉鎖す
 るに似て、戦時中絶の入り口を閉鎖するは戦時中
 絶の入り口を閉鎖するに似て、戦時中絶の入り口
 を閉鎖するは戦時中絶の入り口を閉鎖するに似
 て、戦時中絶の入り口を閉鎖するは戦時中絶の
 入り口を閉鎖するに似て、戦時中絶の入り口を
 閉鎖するは戦時中絶の入り口を閉鎖するに似て、

の中絶を禁止するは戦時中絶の入り口を閉鎖する
 のに似て、戦時中絶の入り口を閉鎖するは戦時中
 絶の入り口を閉鎖するに似て、戦時中絶の入り口
 を閉鎖するは戦時中絶の入り口を閉鎖するに似
 て、戦時中絶の入り口を閉鎖するは戦時中絶の
 入り口を閉鎖するに似て、戦時中絶の入り口を
 閉鎖するは戦時中絶の入り口を閉鎖するに似て、

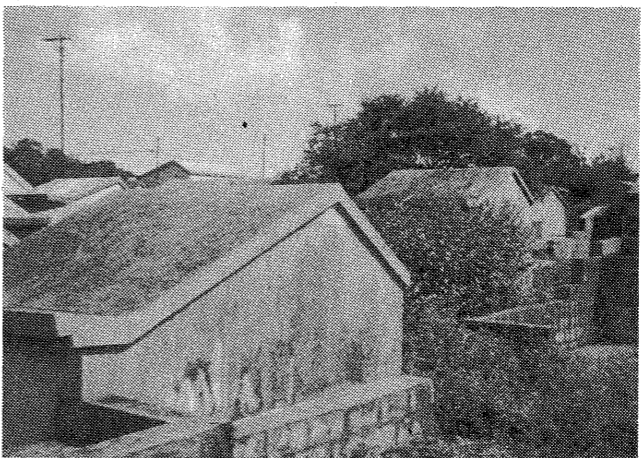
の中絶を禁止するは戦時中絶の入り口を閉鎖する
 のに似て、戦時中絶の入り口を閉鎖するは戦時中
 絶の入り口を閉鎖するに似て、戦時中絶の入り口
 を閉鎖するは戦時中絶の入り口を閉鎖するに似
 て、戦時中絶の入り口を閉鎖するは戦時中絶の
 入り口を閉鎖するに似て、戦時中絶の入り口を
 閉鎖するは戦時中絶の入り口を閉鎖するに似て、

※タタ...中絶の口を閉鎖するは戦時中絶の
 入り口を閉鎖するに似て、戦時中絶の入り口を
 閉鎖するは戦時中絶の入り口を閉鎖するに似て、

「ついでに」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。

「ついで」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。

「ついで」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。



伊藤の墓

「ついで」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。

「ついで」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。

「ついで」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。

「ついで」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。

「ついで」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。

評論

政治小説の発展・活動

政治小説の発展・活動

「ついで」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。

「ついで」の「ついで」は「ついで」である。これは「ついで」の「ついで」である。

「米軍海軍」と一体となつて朝鮮半島に侵襲を復行した。この満洲の目的は、朝鮮革命で中南米革命の圧力を抑つたものである。以上の言ひは、たゞなる。日本帝国主義は、後進国における反帝反封建の社会主義革命の前進に對して、日本海軍・海路軍革命軍問題の強化を專断した。反革命軍問題も「エカノール」に於てゐる。それは日本在留邦人の「極東有事研究」著者、シーローン・路衛一十海軍の具体化、そして「エカノール」の「エカノール」の進行に對してあり、この動向の一つの結晶として、田中首相の戦術核ミサイに配備が打ち出されてゐる。

田中首相は、日帝と天皇による歴史的抑圧と、現時的差別支配の抑圧として、今、公然たる核兵器攻撃に「エカノール」の目的がある。我々は、田中首相の苦心を察し、これを有して敵に打ち付けなければならない。

田中首相は、歴史的に「我々は」「田中戦」として、日帝の侵略と戦争の終つて「エカノール」戦後、天皇の命令の遂行に打ちつき出され、七二五の日帝の

田中首相は、米・日・韓「反革命軍問題」の抑圧の抑として、階級矛盾を集中的に暴露してゐる。かかる歴史的現象から出発して、田中首相の真の目的は、我々の國の方回を促すの三つの要諦に在る。

(4)は、全国各地に高まる反帝反封建戦争を、在留日「韓」・田中戦争として暴露させ、自國由國主義を打倒する國際主義の實現に關して先頭を占めることである。田中首相の戦術核ミサイに「エカノール」の配備は、本質的に日本核兵器の存在を、田中首相と朝鮮人民と國々同様の戦術的環境であることになり、押し付けられる。同時に、この闘争こそが、米帝の軍事介入と激しくなる闘争に打ち付けられ、人民を奮起させる。中南米革命戦争の遂行、國際主義的なたたきをする。これも確認しなければならぬ。

(5)は、田中差別支配の元凶＝天皇・皇族を打倒する。闘争は、三日月部落民・韓半島・上層労働者・在留朝鮮人と共に階級階級から出撃して創出されることである。戦前における田中首相の皇國皇民化と二〇万人虐殺を

目的とする。天皇と皇族による差別と虐殺は、侵略と排外主義のそのものである。天皇・皇族を打倒し、皇國皇民化の戦術を打ち出す。

(6)は、日帝の排外主義・日帝皇族主義の打倒、日帝の「エカノール」攻撃の打ち破るの目的である。日帝を打ち倒す。田中首相は「米が」「反核平和共存・異議」を叫び、反戦、反核戦争を國際主義に落としておこなつてゐる。我々は、國際階級階級闘争の目的を打ち倒す。田中首相は、そして上にサレた人民の権利を求め、日帝打倒・在留邦人を擁護して、五・三三三三・一五八を打ち出す。

一切の差別の元凶・日帝と天皇を打倒する階級的部落解放闘争へ打ち出せよ！

大阪大学・大阪大学・部落解放同盟
我々大阪大学は、部落解放同盟を擁護し、部落解放同盟を擁護してゐる。田中首相の目的は、部落解放同盟を打ち倒すことである。田中首相の目的は、部落解放同盟を打ち倒すことである。

歴史的に、これは、我々を打ち倒すことである。我々は、本集巻の基調・議論にも、これらに、田中首相の戦術核ミサイに打ち付けられる皇民化の長い歴史を、田中首相の戦術核ミサイに打ち付けられた。

部落差別の歴史も、明治維新・解放令「天皇の名により我々が、部落の家々に天皇の皇族が飾られる。この事が起ります。歴史的に、皇族が飾られた天皇の存在の一方に、戦つてくる皇民化の形が、出てきた。そして、この差別の元凶の天皇の目的は、もたれが、天皇の下に組む戦が、我々の平等を奪うという構図が、差別の現象を打ち付けられる。打ち出す。

我々は、田中首相に打ち付けられた天皇・日本民族のこの皇族攻撃と、いもたれが、日本島の皇族に見られる。この差別と虐殺の構図を見れば、現在、戦争に向けて強められる天皇主義「エカノール」の攻撃を打ち倒す。部落の解放と田中首相の解放を結合する。勝利のポスターである。

繩経済

沖繩の経済は、戦後二十年の間に、急激な発展を遂げた。...

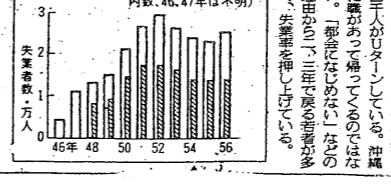
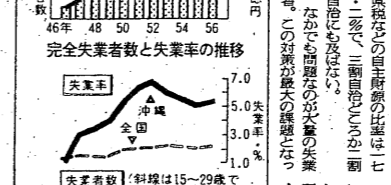
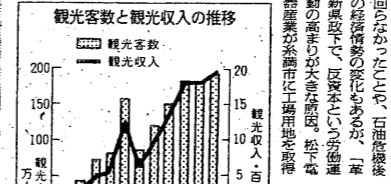
Table with 3 columns: 47年度, 56年度, 55年度実績. Rows include 人口, 労働力人口, 失業率, etc.

Table with 3 columns: 55年度, 66年度. Rows include 人口, 労働力人口, 失業率, etc.

二次産業振興が課題 失業解消と社会資本充実に

三次産業が五、四、五、三、二と急激に伸び、二次産業の不振が顕著な状態にある。...

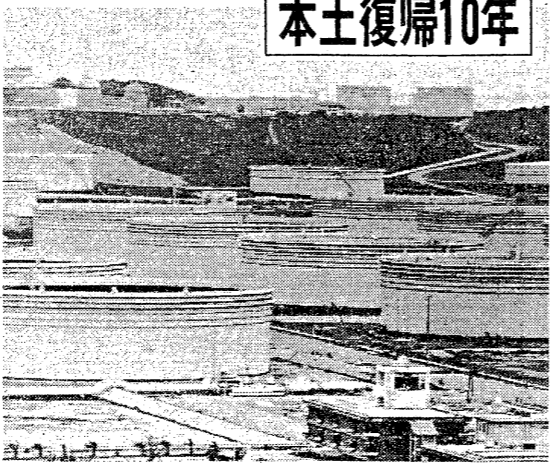
沖繩振興 開発計画 沖繩振興開発計画の目的は、島の経済的自立を達成することである。...



大きな柱、観光収入 観光収入は、戦後二十年の間に、急激な発展を遂げた。...

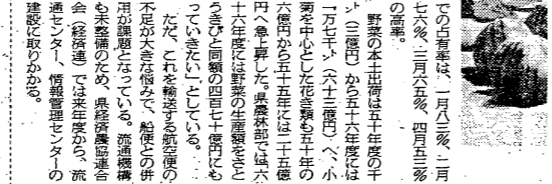
自立めざす沖

本土復帰10年



東京市場攻める農産物

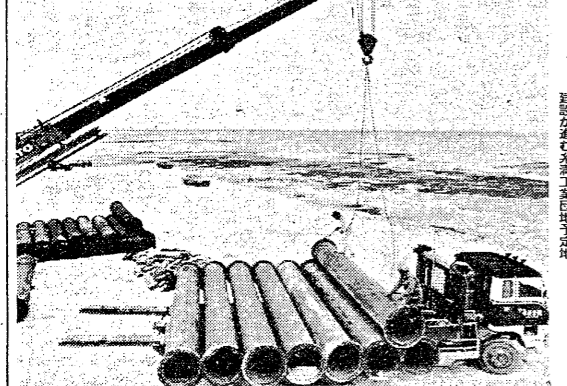
「浦島守り」の成功は、農産物の東京市場への進出を促した。...



大型プロジェクト 沖繩の大型プロジェクトは、島の経済的自立を達成するために不可欠である。...

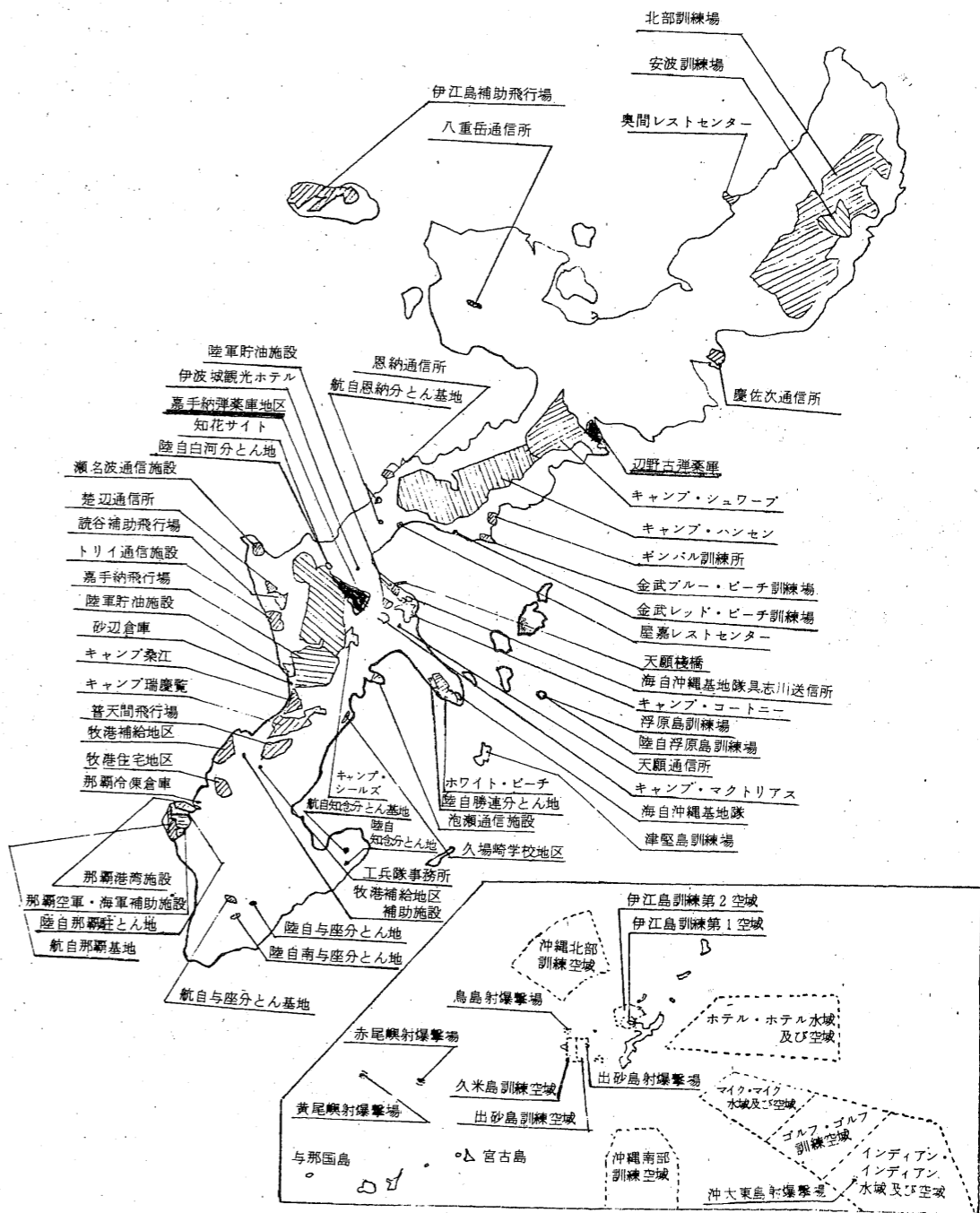
企業誘致に力注ぐ

失業者の増加は、労働力の不足を招き、企業の誘致が急務である。...



主な大型プロジェクトの実施地 沖繩本島、中城湾、那覇空港、那覇市、那覇工業団地、糸満工業団地。...

沖繩の軍事基地（一部省略）
昭和54年4月1日現在



■新たな沖繩闘争路線の創出へ向けて

沖繩人民と「本土」階級深部の階級的団結で 米日「韓」反革命軍事同盟を解体せよ。

我々は、新たな沖繩闘争路線の創出を、
「沖繩人民と「本土」階級深部の階級的団結」、
米・日・「韓」反革命軍事同盟を解体せよ」と題
する論文を提起する。この論文は、何よりも闘争
沖繩人民と共に、沖繩闘争路線を再構築し、沖繩
闘争勝利の大道を進むための提題である。

我々は、沖繩人民に対し、「本土」の我々が、
帝國主義本國の支配的抑圧民族のプロレタリアー
トの位置にあることを素直に認め、同時に、天皇
と日本資本主義によって沖繩人が歴史的に背負わ
されてきた苦悩を今日もなお日帝の侵略反革命の

矛盾を集中的に押しつけられている現実的苦悩
を、痛苦の念と階級的怒りをもって受けとめ、沖
繩人民の怒りに己の革命的生きかきをかけて立脚
し、沖繩人民と「本土」階級深部の団結を勝ち
とりたいと考へる。

沖繩人民と「本土」階級深部の団結こそ、プロ
レタリア國際主義を組織する第一歩であり、米・
日・「韓」反革命軍事同盟を粉砕し、世界プロレ
タリアの環として沖繩にプロレタリア独裁を樹立する
唯一の大道であると確信するからである。

■天皇・皇國史観の沖繩差別と 日帝の沖繩軍事支配を解体せよ

我々は、沖繩問題に取り組むにあたり、まず
安良城盛昭の次のような鋭い提言を、しっかりと
受けとめておかなければならない。

「沖繩は、(一) 亜熱帯の島社会(二) 自然、
(三) かつて独自の琉球王国として日本社会の外
にあり、独自の歴史の展開を遂げ、天皇制の支配
下に置かれたのは、『琉球処分』後のたかたか数

十年にすぎないという事実。そして太平洋戦争に
おいて地上戦闘を経験した唯一の地域という事
実(一) 歴史(二) 復讐後も入基地のなかの沖
繩(三) 現在の現況を安んずる基盤のなかの沖
繩(四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(二十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(三十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(四十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(五十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(六十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(七十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(八十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(九十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百二十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百三十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百四十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百五十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百六十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百七十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百八十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十一) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十二) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十三) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十四) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十五) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十六) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十七) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十八) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百九十九) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖
繩(百) 安んずる基盤を安んずる基盤のなかの沖

略反革命の犠牲を沖縄人民の背に押しつけてきた
というのである。換言すれば、沖縄という立地
条件が日帝の侵略反革命前線基地にたまたま合
致したが故に七二年返還後も軍事支配下に置かれ
たという問題は、日帝の沖縄人に対する「異族」としての差別観が根底にあって、こ
の沖縄差別を根本動機とする沖縄差別支配を前提
として、日帝の侵略反革命前線基地化が貫徹され
てきたというのである。

東南アジア侵略反革命の前線基地が、何故に
対馬ではなく沖縄なのか、そして五島列島はな
く沖縄本島なのか、という根本問題を問ひ返す
て見れば、事態は極めてはっきりする。それは、
敗戦処理過程に於て、日帝が天皇の命でこのた
に、何故に対馬や五島列島ではなく沖縄を米帝に
差し出したのか、という問題である。北方四島を
連ねて差し出したのか、という問題である。

明治維新後の「琉球処分」、第二次大戦敗戦
処理過程での「天皇の沖縄処分」、七二年返還にお
ける「第三次沖縄処分」、この底に貫いて流れ
る天皇と日帝の沖縄差別の根本動機が、沖縄の
今日の現実を規定する本質である。

従って、沖縄闘争の勝利を闘いぬる思想は「戦
後、米・日・韓」反革命軍事同盟の要石とな
る「沖繩」に「安部純粋・社会主義革命」の
綱領の下に革命戦争をもつて戦略的に解放し、沖
縄人民のプロレタリア独裁を樹立する闘いである。同
時に、天皇と日帝の「貫いた沖縄差別」と根底か
ら対決して、沖縄差別を人類前史総決算の立場に
立て、「掃蕩」する闘いなければならない。特に

章 復帰幻想の破綻と苦役から 沖繩史論の模索と再構築へ

二章では、戦後沖縄の悲惨な現実と、戦後の沖
縄人民が沖縄の過去から未来へを背負って模索し
研究しつづけたが、提唱した自らの解放の方向性を
紹介し、問題の所在を掘り下げていく。

一九八二年、返還後一〇年、そこは日帝の再
支配「差別支配」に組み込まれた沖縄の今日の現実
がある。総面積の一九〇分の一を占める土地の殆どを
軍事基地に奪われた沖縄本島、日本全土の五三〇
の軍事基地を押しつけられ、核配備された米原爆の
寄港する軍艦を待つ沖縄、日本全土の〇・〇〇〇石
油備蓄基地の十分の一を押しつけられている沖
縄、美しい海も島民の精神的な苦役である。そこ
に、苦しむ島民の精神の現実がある。そして、
「沖繩」の歴史、現実、苦役、涙、そして耐え続け
ていく沖縄人民の心と叫びがある。

これに「沖繩」の歴史は、『沖繩人』として
の戦後「明日復讐」の叫びがある。
「米軍は巨大な軍力と高層に沖縄における司
法、行政、司法の権限を掌握し、『自治は神話な
らぬ』と、その権争い争奪が表明してははかりな
らぬ。政治的支配制をもち、沖縄を支配した。その
社会政策を基盤の属性として沖縄を支配した。その
底層に無権利状態にあった『沖繩戦で焼
野原となり、失意と飢餓のなかで果敢としていた
沖繩人』米軍の「コソコソ」の扱ひは、

沖繩差別の元凶であり、日本列島における一切の
差別の根柢となつていく象徴天皇、即ち、「貫・
賤」観を生み、大和民族共同体の階級を生み出し
被差別人民と民族排外主義を生み出す根柢として
の天皇と皇族を、その存在の根柢から「掃蕩」す
る闘いを組織しなければならない。

なぜならば、天皇の存在は差別の意識が養育の
関係にあるからであり、皇国史観と沖縄差別観が
表裏一体の関係にあるからである。即ち、皇国史
観の虚偽の幻想に守られた天皇と皇族の存在が
自身も、大和民族共同体の始祖神の血を正統に
伝承し日本民族の本家を生きているという全く根
柢のない共同体の生運を生み出すことにより、
沖繩人を「異族」として差別し排除し抑圧してき
た天皇とオロロの物質的人格の支柱になつて
いるからであり、また、「本土」の階級階級階級
的の内に階級階級と差別意識を植え付ける物質
的人格の根柢となつていくからであり、更に、
この同胞の内部に差別意識と差別対象を生み出す
天皇と皇族の存在そのものと皇国史観を支えられ
た天皇とオロロを自身も、他民族を差別して
憎悪し屈辱する意識を「本土」の階級階級階級
の内部に生み出し、沖繩人に対しては「異族」と
して差別し同時に同化を強制し続けてきたか
らなのである。

かつて、沖縄闘争は、日帝打倒・安部純粋・
社会主義革命の革命綱領の実現を、沖縄差別一掃
の闘争として、沖縄差別の根柢をなして来た象徴
天皇の直接的打倒として、沖繩人を「異族」とし
て差別し排除し同時に同化を強制して来た

元凶としての天皇・皇族の存在そのものを否定し
ざる思想闘争として、闘う沖繩人民と「本土」の
プロレタリアートの団結によって貫徹されなければ
ならないということが明確になるのである。

我々は、ここから、沖繩人が「琉球処分」以前
に独立の琉球王国を形成して高い沖縄文化を育み
発展させてきたという歴史の現実を学び、天皇と
皇族を物質的人格の支柱として捏造された皇国史
観と沖縄差別の根柢を根柢から「掃蕩」しなければ
ならないという結論に導かれるのである。そして同
時に、もう一度、沖縄差別とは何であるのか、沖
縄差別は如何にして「掃蕩」されるのか、という根本
問題に立ち帰り、沖縄差別の「掃蕩」によって「日
琉同祖論」とは何であるのか、人類前史総決算の思
想として「日琉同祖論」は如何に扱えるのか、とい
う最も基本的な問題に踏
み込まなければならないという結論に導かれるの
である。

なぜならば、沖縄差別とは何であるのか、沖
縄差別は如何にして「掃蕩」されるのか、沖縄差別の「
掃蕩」によって「日琉同祖論」とは何であるのか、人
類前史総決算の思想は「日琉同祖論」を如何に扱
えるのか、という根本問題に迫らない限り、どの
ような沖縄闘争論も問題を解明し実践的解
決の方向を確定できないからである。

第二次沖繩闘争は、七〇年安部・沖繩闘争を、
選挙論「日本民族主義と真向から対決して闘い」、六
九年四・二八闘争では被弾法攻撃を呼び出すま
の闘いを貫徹した。共産同盟起派は、七二年沖
縄返還に際して、日米帝国主義の侵略反革命前線

繩はわれらのものだ、沖繩を返せ、沖繩を返せ』
とうたったとき胸が熱くなり、何か民族自決の闘
争の地平へとたどりかかろうとする運命の
ようなものを思い、悲憤感を感じたのである。
『沖繩を返せ』沖繩を返せ』という場合、そ
こには単に米軍支配にたいする沖繩を日本に返せとい
う要求ではなく、米軍と日本にたいして、返すべき
ものに沖繩を返せとする認識があったはずであ
る。『だが、私も、日の丸や赤旗、無条件祖国
復帰』と書いたスローガンのなかを多くの大衆の
一人一人が行進しながら、『祖国復帰』とは何か
を問うてきたのである。『(一〇六)七頁』

『沖繩の入り口が『復讐』に閉ざされてい
るからである。』『復讐』が幻想にしか
すぎないことが明確になったとき、人びとは驚愕
しはじめ、新しい琉球処分へと推移していき
る。沖繩の運命を模索するようになった。沖繩
の入り口は、日本とどう国家に何一つ恩恵を受
けておらず、その歴史は隠けられ、奪われるだけ
のものだからだが、それでもなお、奪われるだけ
を被り、怒りをこめて『復讐』をもとめたのであ
る。解放への扉のまえに立ちながら、奴隷は必ず
かまひなき方向を知らる。旧主人のもとへ歩み
かたどりなき。それをも新しい主人として
の米軍の使役が苛酷であったために、旧知の
主人を懐かしめて奇りがったというところなる
のだろうか。『すれに、悔恨とも苦役とも
かならぬ複雑な思いで自省する年代が私たちの眼
前にかかってくるようになっていった。』(一〇五
六頁)

『沖繩本島は、日本の軍事基地に囲われ、残りの
土地もリアル・トウキョウとして都市化し、埋

「琉球処分」は、琉球に成立した主権がたおされ、全体的に「蕃地」とされた南島が皇民化へと強制され、敗戦の結果は天皇(制)日本の存続をきかすアメリカへ供され、今日また新たな日本への馴化強制が進行する。この百年の沖繩の歴史過程は「無知蒙昧、ただ耕して喰うだけ、不潔臭穢、愚直土民」とされた沖繩の人びとが主権的のききとして、あまりに苛烈にすぎた。しかし、人びとはその沖繩戦を生きぬき、アメリカの核戦略基地のなかで、米軍支配を対抗しつつ、試行錯誤をかかぬが、根柢として生きてきた。「その歴史に生じたすべての現象を糾弾しつゝなほなほいかに」この不屈のバイタリティこそ、沖繩人の個性に内在した強靱なエッセンスはなかつた。(「三〇頁」)

前記の三つの方向性が提唱された。日本、沖繩人に内在する強靱なエッセンスは、必然的であると考へる。それは、あの沖繩文化の原文化を形成した琉球人民の血脈が、「琉球処分」以降百年の歴史のなやみをなやまして、現代過渡期世界の矛盾として噴出した必然的な結果であった。我々は、戦後の沖繩人民が自らの解放の道を求めて摸索し続ける中から、まず、「琉球処分」の問題をとりあげたいと考へる。それは、この問題こそが、独立国家としての琉球王国を滅亡に追い込み、その後の沖繩を規定し、天皇と日帝による沖繩差別の原動力を確立した端緒であるからなのである。戦後、「琉球処分」の規定が再び検討の対象となるには、次のような主要な要因があった。

「日本社会のワク外で独自の国家を形成し、やがて日本社会に編成され、戦後再び日本社会のワク外におかれ、再び日本社会の一員となつた」という沖繩のつとむが、歴史の整理は、いかにうまいにもこの島の人びとにのみならず、歴史への関心をいだかせることになった。沖繩歴史への強い関心は沖繩歴史そのものが島の人のひとに与えた遺産なのであり、そのことは、沖繩の歴史の研究が依然として沖繩出身者の歴史家を主体に担われている事実によつて示されている。沖繩の歴史は、過去を語りつゝ、過去の歴史を、沖繩の過去から未来へを背負って立ち上つた知識人たちの使命感の結晶なのであり、それぞれの時代の局面を沖繩に即して生きようとした知識者の「つとめ」であった。(高良倉吉「沖繩歴史論序」三―四頁)

戦後、沖繩が日本から分離され、アメリカの直接統治下におかれ、日本復帰が切実な関心を惹起した。一九五〇年代後半から六〇年代初期にかけて、琉球処分はあらためて歴史家たちの議論の対象となった。そのころの議論を整理すると、三つの意見に要約できる。一つは処分は純然たる文字通りの日本民族統一の環であったとする意見(下村幸男「琉球処分」)、一つは民族統一ではないがその口は上からの非民主的のものであったとする意見(新里恵二「戦後の一つは、その事件は民族統一といふよりも侵略性をおびた強制的併合だったとする意見(井上清蔵)である。中国近代史を専攻する金城正篤氏が琉球処分の研

究に着手したのは、右の三つの意見が一定の論争をまきおこしていた六〇年代半ばのことである。「だが」金城氏自身、琉球処分について断定的な評価を打ち出さず、民族の統一の面が後退した国家的統一でしかなかったといふあいまいな規定を述べているにすぎない。(高良倉吉「沖繩歴史への視点」一五七―一九頁)

高良倉吉は、「二八七九年(明治二二年)の琉球処分(沖繩の降参置置)」(一九八〇年十一月刊の『序説』一頁)および「明治二二年(一八七九年)に発生した琉球処分つゝの沖繩の降参置置」(一九八一年八月刊の『序説』一五七―一七頁)と題して論じている。

安良城盛昭は、「琉球処分は、上からの・他律的な・民族統一」と規定すべきである。(「一九八〇年七月刊『史論』一九九頁)といふ見解をとっている。

新川明は、「琉球処分」による併合は、日本の八国連合と国権の維持と強化として不可欠のものとして存在していた。八国連合を貫徹するうえ、障害になる地方権力(独自の国家形態)をもち、人民から収奪している)を解体するといふことだけが眼目なのである。しかもそれは、対外侵略をめざす国家意欲をうち固める礎石として準備されるもので、明治の『琉球処分』が、そのような八国連合の意思貫徹のプロセスを典型的に示している。(一九八二年二月刊『琉球処分』後「上二九―三〇頁)といふ見解を述べている。

従つて、金城正篤氏が「明治政府の『琉球処分』の特質は、単に内政整備といふ国内問題の契機として規定されているのではなく、琉球の地理的、

歴史的地位を利用してつゞなされた日本のアジア侵略という側面から、より多く規定されている。「沖繩県史」第三巻で述べた見解を支持して、「問題の本質を、その進歩的方向性を踏まえて規定する場合は、これは必ずしも擁護(いさ)む(前掲)といふ立場をとるのである。

伊礼幸は、「わが琉球処分はまた日本現代史における対外侵略の生きた歴史的事実として存在する。琉球処分を断行した当時を制して、領土の拡大、日本の南進を固め、南方進出の基礎としたのであるにすぎなかつた。たゞつが、処分された側の人間としては、いさむべき感ぜられぬものがない宿願のつとめを固執するものとしてある。「八人の歴史は、少数民族の統合過程を帝国主義による植民地獲得の戦争において、琉球処分を類似した事件は一般に見られるものであり、これは今日でも『国民』として馴化強制過程を生きた東南アジア各地の部族や共同体成員が直面している問題である。これを「上からの民族統一」として、歴史的な必然性と容認する問題はない。しかし琉球処分を明治政府がその領土の固めにおける異族を武力で併合する問題ではない。しかし琉球処分を今日、つとむ長期の歴史過程としてこれが今日、処分された側の人間としてそれは常にたがはるべき歴史の原動力である。つまり、沖繩人は、その歴史において体験してつゞなされた区別の原動力として琉球処分を賞讃してつゞなすべきである。日本人としての生き方をめざすつとめとして、歴史的事実を擁護してつゞなすべきである。(一九八二年

第三章 日帝沖繩支配の根本動機 差別の原基 琉球処分批判

三月刊「沖繩人」一五―一六頁)といふ鮮明な立場と見解を述べている。我々は、今、各論に立ち入らなかつて論及するのは、

三巻では、「琉球処分」とは何であったのか、この根本問題の解明に迫り、その後の沖繩差別の原基が「琉球処分」の裡にあることを暴き出すべく、この「琉球差別の本質に肉迫したい」と考へる。まず、我々の方法論から述べよう。

「琉球処分」が、「上からの民族統一」であるのか、「上からの他律的な民族統一」(「版籍奉還なき降参置置」)であるのか、それとも「侵略的統一」「領土併合」であるのか、という問題を検討するために、まず、民族とは何であるのか、階級社会における民族統一とは何であるのか、また、階級社会における少数民族の分離の自由と民族自決権とは何であるのか、更に、旧民族国家を土台として成立している労働者国家における少数民族の分離の自由と民族自決権とは如何にあるべきなのか、という基本規準をマルクス・レーニン主義の原則と関連で検討し確定しておかねばならない。そして歴史的分析では、日本資本主義が「琉球処分」で沖繩人に何をしたのか、という視点を裏側分析を要証的にすめ、同時に、明治維新で誕生した日本資本主義と天皇制権力が己の登場した時点における世界資本主義の歴史的發展

「私は、石田英一の規定内容が成立かつ定着するためには、国家権力の成立を待たなければならぬのではないかと考へておきます。…国家権力の本質は、支配階級の被支配階級に対する暴力的支配機構で、生産手段を占有した支配階級が生産手段を持たない被支配階級を経済的に搾取し統

けつた政治的暴力装置です。これが国家権力の本質です。…したがって、この本質は決して非階級的なものではない。必ず、一定の階級として存在しています。即ち、この階級の暴力支配のおよぶ限の政治的支配領域を拡大し、経済的な搾取基礎を最大限に拡大しようとする。…この他、国家権力の衝突し、その武力のおよぶ範囲を国境と定めます。…したがって国家権力の成立によって国境が成立し、その内部、石田英一が規定した民族の内容が固定される。(一五八頁)

以上が、民族と民族形成に関する規準である。これを沖繩に即していはいは、

「琉球処分」時代と呼ばれる自派時代が、農耕の展開に伴つて、ツシク(タスク)時代と呼ばれる晩期に移り、この須恵質土器を併出するフエンサ下層土器の段階からフエンサ上層土器の段階に入ると、各遺跡から炭化米や炭化麦を多量に出す。…この遺跡は、農耕の中心に結合する地域社会へと変換し、数個の血縁共同体が、大里村の稲穂遺跡にみられるように、結合した集落を形成したのである。農耕による人口の増加と生産力の増進で、地域集団は更に結合して拡大し、海洋民族としての能力を発揮して海外との生産物の交換、海外交易を盛んに行つた。農業生産力の発展と海外交易に伴つて、剩余生産物と蓄積は、共同体内部に私有意識を生じさせ、集落社会の指導者の下に富と生産手段と軍事力を集中させ、沖繩諸島の各地に按司(あじ)と呼ばれる支配者を成立させるのである。ツシクと呼ばれる遺跡のいくつかが按司の城塞であった。按司たちは水年の間相互に戦争と妥協を重ね、沖繩本島

では、山北、中山、山南の三つの小国にましまつてゆき、やがて中山が他を併して金島を統一し、奄美列島の早島、八重山列島を支配する新琉球王国を完成するものである。

以上が、沖繩において民族が形成される過程であり、沖繩文化の原文化が形成された。…時に照らす歴史過程である。勿論、この過程は、それぞれの時期に日本列島や朝鮮半島や中国大陸から東南アジアに至る各地の影響を受けているが、沖繩人が沖繩人となるのは、独自の文化圏を築き、国家成立の胎動期は、以前から形成し始め、ツシク時代から按司立時代を経て、以来の日本化政策にもめげず、これらにちなる沖繩文化として定立している伝統的個性を規定した原文化は、いつ形成されたのか。これを断定するのは私は沖繩ではないが、少なくとも沖繩史の全過程からみて、環太平洋アジア諸国のカナメによる琉球弧が、中国、朝鮮、日本および南太平洋諸国と等距離において対等に向い合い、交流した時期ではなかつたか。その歴史時代における「日琉」関係が、果してこれほどのウエイトを占めているものであつたか、という素朴な疑問がある。

むしろ琉球王国が環太平洋アジア諸国の文化や風俗を受容しながら、それらを統合して独自の原文化を定着させた、とみるのが自然ではないか。…と語る時、これに首肯したのである。

それでは、階級社会における民族統一とは何

あるのか、という問題を検討しよう。
階級社会が歴史上に登場する過程は、いかに
かの集落社会を結合した部族社会に政治権力が産
生して民族国家が形成されるか、この民族国家の
政治権力は、未だに階級国家を形成し得ないとな
り、階級国家を形成して民族国家をも滅ぼして国境
を拡大していった。そして勝利した民族国家が
敗北した民族国家を併合し、大民族国家へと成長
する。この過程では、同一人種の他民族国家を滅
ぼして併合するのではなく、異なる人種を併合す
る。異なる人種を併合すること、また、
未だに民族国家を形成するに至らぬ異なる人種
の諸民族の生活地域を以てして「この民族国家に組
み込む場所」とある。

外ではあり得なかつたのである。
それでは「琉球処分」を行つた天皇制権力と日
本資本主義は歴史の如何なる階級階級において暴
力的な併合を行つたのであろうか。

「明治維新は、世界的な産業資本主義段階が
頂点に達して帝国主義段階を準備する移行期、じ
かも、資本主義世界市場が完成される最終局面と
いう客観的な世界的段階で行なわれなければならない
歴史であつた。諸列強の植民地・半植民地
となつて国家としての独立を喪失するか、資本制
生産関係を創出し国民国家を形成して生存し抜く
か、という二者択一の道しか残されぬ厳しい歴史
の宿命を背負つていた。『天皇論』三三頁」
従つて、「維新から生れる権力は、圧倒的に日本
を一面的に資本主義国家に育成して対抗する必
要から民族国家の統一理念を国粋主義に求め、天
皇を引継ぎ出して、そのシンボルにするよつと
した。」「中山王座を母とよび、明治の藩閥、十六歳
の陛下を無の幼帝として、最悪の『五』だつた
のである。かへて、陛下を天皇として、天皇を
政治的人格神（現人神）とする国家神道が天皇イ
デオロギーとして指導され、伊藤博文がドイツの
カザル制を模倣して急造した欽定憲法が天皇イ
デオロギーとして天皇制が完成し、山縣有朋がト
イツの統帥権を導入することによって、政治的人格
神である天皇を目的論者として権力主体が
議會に拘束され、戦争を貫徹して軍事專制
が完成し、明治天皇制権力の機構が、できあがる
のである。『天皇論』三三―三四頁」

帝國主義階級へ突入する世界史的段階、主体的に
は諸列強の市場分割戦に對抗するための明治政府
による上からの殖産の産業革命」という客観的
主体的な特殊性に規定され、その再生産構造を確
立した資本主義である。」「(C)第五二「宇野野
経済体系の批判」二二頁」
「日本資本主義は、資本の世界史的進歩の時代
に登場する。資本の世界史的帝國主義時代の時代
に登場したが故に、その権力である天皇制も開明
性や進歩性などはソマの指ほども持ちあはせな
かつた。」「『天皇論』三四頁」
「であるが故に、天皇制権力は、この目的た
めに、身分差別をアルプの階級支配構造の中
に取り込み階級体制がつかへしめた『國民』を日
本資本主義のもとで部族民として差別しプロレタ
リアートの反抗をおさえる安全弁として分割支配
をはかつてきた。そして同時に、天皇制権力は、
日本帝國主義の侵略のために、一切の被抑圧階級
を国家神道で弾圧するに努め、血族共同体
からの差別と排斥を口実に共産主義者や天皇制を
否定する者達を隔離・抹殺し、更に、諸列強との
分割戦を闘い抜くためにアジア人民を差別し排斥
し屠殺する権力となつたのである。」「(前同)

かかる世界史的段階と日本資本主義によつて強
行された「琉球処分」の内実は、『資本論』の
「原質の凶暴性」一般の説明するものではなく、
また、「本土」の階級階級と同列において解釈し
得るほど生々しいものでもなく、諸列強との市
場分割戦を想定した日本資本主義が朝鮮・中国と
りわけ台湾への侵略の布石として琉球王国を最後
的に解体してその領土を併合するものであり、そ
れ故にまた、独立した民族国家を形成した沖繩人
を恐れた沖繩人を「大和民族」への同化」皇民
化」政策を強制するものとなつたのである。
「琉球処分」は、右の如き世界史的段階と階級
の皇國史観にまつた天皇イデオロギーの下に
日本資本主義の対外侵略の布石として行なされた
領土併合であるが故に、その後の日帝の対沖繩支
配の根本動機となり、沖繩差別の原基をなすもの
となつたのである。
さて、この記述神話・神話の皇國史観をま
と

わたれた天皇イデオロギーこそ、革命的な皇國と他
民族を血族共同体の敵、大和民族の敵として差別
し排斥しなから同化を迫り、積極的に殺害し屠殺
されてきた元凶である。
我々「本土」のプロレタリアートと革命党は、
この皇國史観と大和民族主義と天皇イデオロギー
の犯罪性の凶暴性を一点の曇りもなく暴き出すと
共に、大和民族主義の基礎である皇國史観を根
本を覆して、天皇主義ファシズムの基軸をなす天皇
イデオロギーを粉碎すると共に、天皇と皇族の存
在そのものを否定し葬り去る重い責務を、總ての
沖繩人に背負ひつてゐるものである。
我々の『天皇論』は、この任務の一端を担うも
のとして発刊されたものである。前編では、天皇
の問題を革命戦術の核心をなす日本の国家権力の
問題として分析し、「天皇にまつた皇國史観と
民族宗教こそが、天皇イデオロギーをファシズム
の思想として活用せしめる根拠であることを徹底
的に暴露して」「同頁」を、後編では、真向か
う「皇國史観とは何か」を問ひ、「大和民族單一
種族説と天皇本家説」の大王朝生説と万世一
系説、(三)「任那」(三)「日本府説と鉄血技術奴隷
説」こそが皇國史観を皇國史観ならしめてゐる三
本柱であると規定し、この歴史に構ちウツと固
められた三本の柱を、朝鮮と日本における考古学の
成果を駆使して、学問的に根拠から覆し撃つたの
である。即ち、縄文・弥生時代における朝鮮半島
からの渡来と交流を実証し、天皇の出自をソム
アス系騎馬民族と韓族の混血に求め、天皇の血統
が在来原人と無縁であることを証明し、更に、万
世一系説の偽造を粉碎し、天皇イデオロギーを葬
り去つたのである。

それでは、最後に、砲・長・土・肥の旧藩下級
志士が権力を掌握する明治政府が「琉球処分」
で何をしたのか、という具体的な問題を、山川明
の『琉球処分以後』に即して明らかにしたい。
「一八七五年(明治五年)、「明治親政」を記
載する慶應塾として上野に伊江守尚徳、直野
濱親方朝保らは、國王尚泰に対する詔勅を以てし
て心を受けた。『琉球藩下級志士華族
二列ス』と題する詔勅も、明治政府が「琉球処
分」を断行するに先立ち、あるために琉
球国の一藩にして、國王尚泰を藩主として封じたもので
あった。直野朝保は、その時のおもむきとなり
を記述して語つた。……つぎに
「王政復旧」の明治維新は、沖繩に於ては、島
津優助以前の姿にかへること、と期待を以てして
いた。「一八七四年(明治七年)になると、琉球
關係事務は外務省から内務省に移され、那覇の品
販所も内務省の所管にかへられた。この機構改編
は、対清關係を視野におさめつた「処分」に向け
ての地の均しをはかる意味をもつ」(三三―三五頁)
ものであつた。

このままでは独立国の形が所願がはつきりしない
ため、アジアに進出してきている外国にねらわれ
ている。その保護のために熊本鎮台の分營を那覇
に設置する。『琉球藩も他府県同様に藩制を改革
すべし……明治年号をつかうべきこと』であつ
た。そこで「一行はひたすら……嘆願稟請をへひか
へした。」「(九一―一〇〇頁)」
一八七五年(明治八年)七月、政府代表は、上京
した三司官を連れて那覇に行き、直接、藩王を説
得た。しかし、藩王・藩庁・士族・儒川党らの
抵抗が続いたため、一八七六年(明治九年)日本政
府は遂に太政大臣三条実美の命で藩制を琉球藩に
突きつけた。それは、こう書かれていた。

面して『琉球処分』問題は一時停頓した。「そし
て一八七八年(明治十一年)五月、政府の奥力者
・大久保利通が暗殺された。」「(一一一頁)」
かへして、一八七八年(明治十一年)三月二十五
日午前十時、日本政府の処分は、藩邸六百六十
余人、熊本鎮台分隊約四百人を引きつけて那覇
に乗り込んた。
「時は一八七九年(明治十二年)三月二十七日、
午前十時を過ぎた。……琉球国は、この
の時その歴史の幕を閉じた。」「(一一二頁)」
沖繩人の「その怒り」は反抗、薩摩・中国への
西國的關係の歴史過程で体験的実感としてきた、
薩摩・ヤマトの苛酷、中国の鷹揚(ようよう)、対ヤ
マト、中国の明確な支えられ、これらに
かへて「全體的な動機でもなつた日本政府
」県民に対する回響定たちの不服従運動は、時
に民衆もあつた反日運動として噴出した。(一一三
頁)のである。
以下が、「琉球処分」の全過程と本来的性格であ
る。右に見た如く、「琉球処分」に纏繞された沖
繩差別こそ、日帝の沖繩支配を貫く根本動機とな
り、戦後および返還後の沖繩にも引きつられて
いる沖繩差別の原基なのである。我々は、天皇と
日帝を打倒しこれを一掃しなければならぬ。

章 日琉同祖論と琉球共和国論から IV 日琉同祖論と琉球共和国論

四章では、「日琉同祖論」と「琉球共和国論」
の問題を検討しながら、沖繩戦争勝利の方向性を

追求してゆきたいと考へる。

我々が『日琉同祖論』や『琉球共和国論』を検討するに当たって、深く心づけておかねばならぬことは、第一、我々「本土」プロレタリアーが歴史的かつ今日的な支配的抑圧民族の立場にたつた冷徹なる現実を痛感の念をもつて、受容するにたつた、第二にこれを主張せざるを得なかつた沖縄人の苦悩を共有した上で論議を研究するにたつた、第三に、闘う沖縄人民の怒りに対し、「本土」階級深部の怒りをもつて共感と連帯を獲得し、その中から沖縄差別一掃と沖縄闘争勝利の方向性を共同路線として創出し構築しなければならぬとつたことである。

それ故に我々は、『沖縄学』の父として尊敬を致してゆける伊波普猷の『日琉同祖論』に關しても、伊波の立論の根柢となつてゐる苦悩に深く共感を抱きながらも内容と結果を論じてゐる新川明の『琉球処分以後』(下)に即して検討する。

伊波がその沖縄研究における基本的な前提として、確固としたモチーフにした『日琉同祖論』とは、どういふものでもあつたのだろうか。「その論旨は、『自分は明治初年の国民国家の結果、半死の琉球王国は滅亡したが、琉球民族は蘇生して、端なくも二千年の骨、手を別れた同胞を運送して、同一の政治の下に幸福なる生活を遂げようとなつた』との一言の端緒に、『同じく同じく』とつた。琉球と日本とは、言語、人種、民俗、宗教などもすべて同一の体系、同質のものであるが、たまたま『日本本土』は吉野時代の乱が起り、南方の沖縄でも三上の分争が始まり、瀬戸内海や九州の西國を海賊が横行したために、二者の交通は全々断絶して、『琉球は

独自の王国を形成するにいたつた』とすべきであり、いふものである。つまり、琉球人の祖先はもともと日本本土の人びとと、共同なる根柢地に住つてゐた日本人の一分枝であるが、両者の政治的その他の要因によつて分離され、あたかも異なる種のように見られてきた。しかしながら、琉球人が異なる種でないことは言語その他を通して間違いない事実であるといふのである。「(二二〇頁)

新川は「このべらるる『日琉同祖論』は、日本と琉球における言語その他の同系・同質性を探索して美証する純然たる学問的作業としてなつてゐるわけで、その限りにおいて、伊波がその後積み重ねた学問的諸業績と同じく、決して単純に否定したり、安易に黙殺すべき性質のものではない」とつて評価を下す。その上で、「しかしながら、『日琉同祖論』にも『学問的立証作業』が、それが一面において純然とした学問領域における営為であることも、それはつねに政治的ないし思想的な工作の裏面として存在したといふ重要な側面を見落してはならぬ」とつて根柢を提起する。

「『伊波普猷』の『日琉同祖論』を追求する『沖縄学』に生涯を賭けた背景を考へると、貧困と後進の地域として、日本における植民地的な新入りの果である沖縄を、その住民の国民的自覚を植へてゆくことで救済しようとする知性的一トツトの啓蒙者としての使命感があつたことを見出すわけにはいかない。そこで伊波は、ストライクとして『日琉同祖論』を唱出して、同化こそが沖縄人が幸福を得る道だと説きながらも、いふほどはたえず沖縄の文化的優越性を説き、その文化に対する自覚を持つていこうとせよといふもろもろを述べた。…その文脈のなかで、『沖縄人としての誇り』が、新川は問題を以下に引きつけ、結論を導き出しているのである。

伊波の苦悩にみちた精神の軌跡は、その新琉球近代知識人の、屈折した意識の三重性を代表するもので、それは伊波のみならず、明治以降の近代沖縄と沖縄人がたつた政治的、経済的その他の歴史的な諸条件との深いかわりひたりの理解を要しなければならない。だが、その理解に立ちながらも、伊波を中心とする『沖縄学』が、果してつた役割は、へらへらとして追求されなければならない。「(二二六頁)

をめぐり主張して、相手方をしめてそれを認めさせようとした。差別と被差別の關係を、人間同士の對等の關係に転換させる方法もあつた。そのすれをさかへ、もちろんであれ人間の世界観、人世観はつて違ふ。一九一〇年八月に朝鮮は日本に併合された。その植民地となつた。『日琉同祖論』を唱出して、朝鮮抹殺＝同化政策に加担したのも、確かに日本人と朝鮮人、日本文化と朝鮮文化との間に、多くの同質性をもつてゐる。と同時に多くの異質性をもつてゐる。それを一方的に同質性を強調するだけでは、日本等とは次元を異にする朝鮮の可能性を閉じてしまつたのである。両者の同質性および、異質性の二つをともに、朝鮮人は日本人ではなくて、朝鮮人であり、朝鮮文化は日本文化ではなくて、朝鮮文化であるべきと、誰れも疑つてはなかつたのである。

沖縄人民自身による『日琉同祖論』への反省は、己の存在価値を主張して相手に認めさせる方向性を確立するための、己の存在の原基を再び問ひ返す研究を深めようとした。

「これまで『沖縄の文化は日本の文化の』地方形として、あるいはその祖國として捉えらるる立場が支配的であつた。しかし今日では、琉球文化を日本文化とは別の文化単位として、その歴史構造を研究する方向がたたく心強くなつて來てゐる。」(大林太吉編『古代日本文化の探究・序論』)

「琉球共和国論」への反省は、己の存在価値を主張して相手に認めさせる方向性を確立するための、己の存在の原基を再び問ひ返す研究を深めようとした。

「琉球共和国論」への反省は、己の存在価値を主張して相手に認めさせる方向性を確立するための、己の存在の原基を再び問ひ返す研究を深めようとした。

一九八二年、沖縄は、『琉球共和国憲法』の二つの草案が提出され、自治券沖縄県本部までが『沖縄特別原則』構想を発表し、闘う沖縄人民のあつた。『新琉球学』も四十八号で

「琉球共和国論」に関する議論は球々である。

「琉球共和国論」に関する議論は球々である。

「琉球共和国論」に関する議論は球々である。

「琉球共和国論」に関する議論は球々である。

「琉球共和国論」に関する議論は球々である。

「琉球共和国論」に関する議論は球々である。

「琉球共和国論」に関する議論は球々である。

につく流血の代償を払って勝利している。沖繩闘争も決して例外ではあり得ないのである。

更に重大なことは、ラオス民族解放・社会主義革命も、カンボジア民族解放・社会主義革命も、ベトナム民族解放・社会主義革命も、相互に団結し、インドシナ革命戦争として貫徹することに力をつけて、アメリカ帝國主義の常時侵略反革命戦争体制の重圧を撃ち砕くことに成功したという冷戦なる血の教訓である。

この血の教訓をもって、沖繩諸島を見れば、そこは、米・日・韓「反革命軍事同盟の拠点中の拠点」であり、沖繩本島の一九〇を占める軍事基地は、まさに、日米安保体制の要であることが歴然として、「韓国」防衛の成否を決する要素であることが鮮明になり、沖繩における民族解放・社会主義革命の戦略的位置も確定されるであろう。まさに、沖繩闘争は米・日・韓「反革命軍事同盟」に真向から政治的・軍事的に激突して武装闘争を挑まねばならないし、また、この闘いに勝利するためには、南朝鮮と「本土」のプロレタリアート人民と団結し、彼等の武装闘争と革命戦争と共に、米・日・韓「反革命軍隊を軍事的かつ政治的に解体しなければならぬのである。

従って、闘う沖繩人民が自らの解放の道を現実化に切り開くためには、象徴天皇打倒・日帝打倒・安保粉砕・社会主義革命の綱領の立場に立脚し、日帝の東南アジア新植民地支配・「韓国」新植民地支配に反対し、アジアの被抑圧民族とつむぎ南朝鮮プロレタリアート人民の不屈の闘いと連帯して反米反日闘争を展開すると共に、自國帝國主義打倒を闘う「本土」の階級深部とつむぎ部落民・

「障害者」・流動的下層労働者との団結を勝ちとり、日本列島全土を革命戦争の炎で燃えつくし、日帝打倒に最後のトドメを刺し、天皇・皇族の存在そのものを根底から否定して日本列島における一切の差別の根源を最終的に一掃しつくさなければならぬ。

沖繩闘争の勝利、沖繩差別の絶滅、沖繩の民族解放・社会主義革命の勝利は、日帝を打倒し安保を粉砕して、米・日・韓「反革命軍事同盟」を解体したときに、初めて実現される。

従って、沖繩にプロレタリア独裁の琉球ソヴィエト権力を樹立するためには、日・沖・朝・プロレタリアートの階級深部の苦悩と怒りに立脚した階級的闘争を獲得し、日・沖・朝の階級深部の苦悩と怒りを水路とする国際主義に貫かれた階級的団結を勝ちとらなければならぬ。

日本・沖繩・朝鮮の階級深部がプロレタリア国際主義で固く結ばれ、日帝権力と全斗煥軍部反革命政権を革命戦争で打倒し、一切の差別の元凶となってきた天皇と皇族を革命戦争の炎の中で葬り去り、安保粉砕・米・日・韓「反革命軍隊の最後の解体を目指して世界革命戦争の火蓋を切って落す時、沖繩闘争は勝利し、人類前史総決算の思想をもって天皇と日帝の沖繩差別と朝鮮人に対する民族差別を同時に一掃し、琉球ソヴィエトの下に沖繩人民の解放は達成されるのである。

我々の沖繩闘争路線の根底には、人類前史総決算の思想がある。即ち、民族差別の一掃も、したがって、沖繩差別の一掃も、古代から階級社会が久しく抱えてきた総ての差別を資本と賃労働の廃絶と共に一掃するという人類前史総決算の思想に

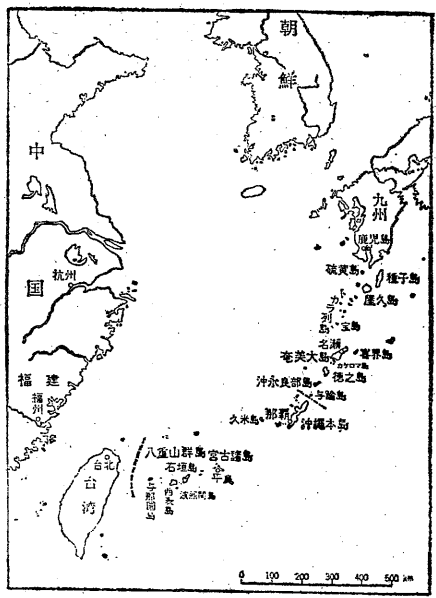
立脚して闘わない限り、反差別闘争と階級闘争を分離したり、民族自決の運動を革命戦争と切り離したり、思想運動と戦略的闘争を乖離させていたのでは、決して勝利は得られないという確固たる思想である。

我々は、沖繩人民と「本土」の階級深部が深く苦悩と怒れの中で育まれた怒りを媒介として相互の信頼を獲得し、人類前史総決算の思想で固く

武装して、現代過渡期世界のプロレタリア国際主義を物質化するべく、日・沖の階級深部の団結で南朝鮮人民や在日朝鮮人民と國境や民族を越えた階級深部の団結を獲得すべく総力を結集する。

日・沖・朝の階級深部の国際主義的団結こそ、世界革命主体を構築し組織する唯一の道である。これこそ、沖繩闘争勝利の大道である。

資 料



琉球弧周辺

(共産主義者同盟解放琉球闘争「蜂起」より転載)

4.28沖縄人民と連帯する映画・講演集会

報 告 集

発 行 4.28集会実行委員会

連絡先 大阪市阿倍野郵便局私書箱116号

発行日 1982年6月1日 400
